

書名：詩ってなんだろう

著者：谷川俊太郎

出版社：筑摩書房

出版年月：2001年10月

総ページ数：137ページ

ISBN：4480814388



推薦者

小山英恵

鳴門教育大学大学院准教授
芸術系コース（音楽）

学生生活を送るみなさんにとって、読書はどのような意味をもっているのでしょうか。大学生の頃の私は、まさに「藁にもすがる思い」で読書をしていました。私は幼い頃から音楽専門の道を歩んできましたが、事情あってその道を断念。その後、再出発の猶予として大学に入学しました。そのため入学したその日から「4年後には大学から出されてしまう。その後どうやって生きていこうか。」という強迫観念との戦いが始まりました。音楽の道以外をみてこなかった私は、他の世界をまったく知らなかったのです。そのような大学生活のなかで毎日通ったのが、図書館です。これからの自分の生きる道を求めて、とにかく手当たり次第に本を読みました。今思えば、もう少し一冊一冊を丁寧に読んでおけばよかったと思うのですが、何を讀んだのか覚えていないほど、さまざまな本を乱読していました。ただ、気に入った文章は、書き留めておくようにしました。

このたびみなさんにお薦めする本を考えるにあたって、大学時代の乱読のなかで書き留めたファイルを久しぶりに読み返しました。すると、書き留めた一つひとつの文章が、今の自分の生き方や研究の根幹になっていることを発見し、驚きました。読書は、それによって新たな世界が自分に入ってくるものですが、そのなかで自分が共鳴するものを自覚していくという意味で、まさに自分さがしとなるのだと思います。その後大学院へ進学してからは、もっぱら自分の研究テーマに関する専門書を読むことになったのですが、読書によって自分を発見していくという実感に変わりはありません。

さて、ここに選んだ1冊は、乱読時代を経て、教育のことを考えはじめてから深く共鳴した本です。本書は、詩人谷川俊太郎さんが、小学校の国語の教科書に対する危機感から書かれたものです。「詩とは何かという問いには、詩そのもので答えるしかないと思う」（p.136）という本書の言葉は、詩の問題だけではなく、いまここに生きている人間が何かを学ぶということ、わかるということ、そしてその何かを教えるということの問題に鋭く迫るものだと感じています。

本書では、「詩は一篇の作品に感動する心のうちに生まれる」（p.136）、しかしそこには「長い詩歌の伝統」（p.136）がある、という考えをもとに、詩が選ばれ配列されています。本書を読むと、詩の身近さと奥深さを感じ、ゆたかな気持ちになれることでしょう。みなさんには、子どもと教師と両方の立場に身を置いて読みながら、「詩とは何か」という問いへの、自分なりの答えをみつけてほしいと思います。

